2022年度 ドコモ市民活動団体助成事業 活動成果報告書

2023/9/21

団体名	NPO法人　Sunny Side standard	活動タイトル	子どもたちの居場所づくり事業

望ましい社会状況および団体のビジョン（社会的役割と活動基盤）

●地域の望ましい社会状況(ビジョン)	貧困家庭、不適切養育、障がい、いじめ、不登校、施設退所など、様々な課題を抱えた子たち。様々な事情で子どもの課題と向き合えないでいる保護者。このような子どもやその家庭が孤立することなく、地域の人々とのつながりの中で、支え合いながら、子どもが将来自立して生活していくために必要な力が育まれていく。また、貧困や虐待などの負の連鎖が繰り返されないような地域社会を実現する。
●団体の社会的役割(ミッション)	当団体は児童福祉分野、障害福祉分野におけるソーシャルワークを実践してきた。現在は年齢や分野を越えて、世帯全体を総合的・継続的に支援できる基盤づくりに取り組んでいる。 　地域住民や近隣大学生のボランティアが自主的に活動に参加し、学び、活躍できるような場づくりを行ってきたノウハウを活かして、子どもと地域をつなぎ、子どもを孤立や権利侵害から守り、健やかに成長できるようなシステムを構築することが当団体の社会的役割である。
●団体の活動基盤	人材育成については、運営スタッフがこどもの直接支援に関わる学生ボランティアや地域のボランティアに対して適宜、子どもへの対応に相談にあたること、毎回の活動の振り返りでこどもの状況を共有することや個別支援計画の作成により子どもへの支援の在り方を深める。人材の確保については、学生については大学にインターンシップ制度の案内をし募集していく。地域で活動報告会を実施して地域のボランティアを募る。活動資金については、この活動の安定性や継続性から行政からの補助金や委託事業を受けることをめざしたい。また、運営スタッフがもつ様々な知識をスタッフ会議で共有し、ボランティアにも団体活動に必要な知識として伝えて理解を求めていく。

■活動風景

【クリスマス】大学生がら準備したプレゼントやクリスマスカード、地域の方からのプレゼントを渡しているところ

【流しそうめん】水遊びの後、初めての流しそうめんに挑戦しているところ

■活動報告

　子どもたちの夕刻の居場所では、週1回一緒に集まってご飯を食べて遊ぶことにより、ストレスが緩和され落ち着く様子が見て取れた。新型コロナウイルス感染症5類感染症に移行後、色々な行事が縮小のままで、町内の行事への参加もできなくなってしまったが、その代わりに月1回、体育館で体を動かすなどの取り組みを続けている。体育館では、様々な年齢の子どもたちが一緒に体を動かすことが多くなり、中学生が小学校低学年の子どもの面倒を見ながら一緒に遊んだり、また中学生もスマホから離れて遊ぶことができた。子どもたちの遊びの中に大学生のボランティアや社会人のボランティアがうまく入っていき、大人と子どもが楽しむ姿もほっとできる風景であった。また支援者から提供される食材を子どもたちの家庭に配布し、保護者の状況を確認するなどの見守りも行い、子ども、家庭への支援となっている。地域の方々の協力も大きく、サンドアートを教えに来てくれたり、畑の作物を届けてくれたりと直接間接にいろんなかかわりが生まれていった。子どもたちが安心でいる場所で安心できる大人に囲まれて過ごすことのできる地域に根差した居場所として、この場所が成長しつつあると考えられる。

■1年間の目標に対する達成状況(まとめ)

　今年度の活動として、子どもたちの「夕刻の居場所」を基盤に、地域との連携が進んだこと、子どもたちの課題に対して支援計画を立てて「この居場所で子どもたちの課題に対してなにができるか」をボランティアもいれて検討したことがおおきな活動の成果であった。太子町子育て支援課と地域課題について話し合う機会が増え、「太子町子どもの居場所づくり活動特別支援補助金」として50万円を付けとることが出来るようになった。単年度の補助金ではあるが、初めて行政から支援をしていただけるようになった。子どもたちへの個別の支援に関しては、毎月、個別の支援会議を開き、子どもたちの現状から課題を出し、それに対して何ができるのかの具体策を考えて、実行した。子どもたちへの支援が計画的になることによって効果的な関わりができた。子どもの状況のとらえ方、それに対するアセスメント、プランニングを考えることは、学生にとって実際的な深い学びになった。　また、学生たちがさらに積極的に子どもたちへの支援のプログラムを自分たちで考えることに取り組んでいくようになった。これからの若い人材の育成に大きな一歩となった。

■事業を通じて得られたノウハウ

　少しづつ民生委員さんや地域の方々に子どもの状況（個別の事情についての話はできないが、一般的な子どもの現状と課題、太子町でも例外ではなく同じような課題があること）や活動の話をしていくことで、理解が得られ、お手伝いや、寄付などが増えてきた。地域の中には、子どものことについて考えてくれる人たちがいて、でもなにかしたいとは思っていてもどうしたらいいかわからない思いを持っていることがわかった。小さな町なので、新しい取り組みが理解されるか、不安が強かったが、大きく一気に広めようとしないで、少しづつ広めていくことが有効であることがわかった。
行政については、まだまだ「地域で子どもを育てい く」ことへの理解が進んでいないことがわかり、子育て支援の部局でもそれについて悩んでいることがわかった。一緒に悩める人たちとのつながりから、少しづつでも「地域での子育て」への理解を進めていくことをしたい。

■望ましい社会状況を達成するための課題

　すべての子どもたちが安心して暮らせる、すべての保護者も安心して子育てができる社会が理想的であると考えている。そうなるためには、「子どもの人権」というものを多くの人たちに届けて、理解してもらうことが大事である。「子どもの人権」にうたっていることを実現するために、なにから取り組むことができるのか、大人も子どもも一緒になって考える場があればいいと思う。
　この課題は大きいが、まずは、当団体で「子どもの人権」について学び、それに沿った活動なのかを日々確認しながら、活動にあたっていくことからはじめ、それを少しづつ広げていければと考える。

■活動成果のアピールポイント（自由記入）

この1年間の活動を通じて	地域との連携とこれからを担う人材の育成 寄付の仕組みつくり	を達成しました。

■受益者の具体的な変化（自由記入）

子どもが悩んでいることなどを大人に相談することができるようになった。
大学生やいろんな大人と関わることで、たくさんの大人モデルを得た。
遠足などの取り組みを通して、普段できない経験を積むことができた。
自分自身のことを考えたり、受験や自立にむけて前向きに頑張ることができた。